

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

華人宗教とヒンズー教の重なる領域

古賀万由里 (開智国際大学国際教養学部・教授)



マラッカ州郊外のチンディアン寺院 (筆者撮影)

2020 年 2 月にペナン州でヒンズー教の祭典「タイプーサム」に参加した際、ミルクの入ったつぼを頭に載せたり、重い荷、カーヴァディを担いだりするヒンズー教徒に交じって、頬や背中に串や針を刺して寺院を参拝する華人の姿を目にした。串や針を刺す行為は、何度も祭礼に参加した先達によりなされ、通常は苦痛を伴うが、信仰からくるトランス状態に入っていれば、痛みを感じないという。

華人の宗教は一般的に、仏教、道教、儒教の習合宗教であるといわれるが、なぜ異教のヒンズー教の祭礼に、自傷行為をしてまで参加するのだろうかという疑問を持った。

同じくペナン州のマーリアンマン寺院へ行くと、そこで出会った華人は、ヒンズー教のマーリアンマン女神は、観音と同じであるという。元々観音はインドでは男性であったとされるが、中国では女性的な姿となり、マレーシアやシンガポールでは、南インドの土着の女神と同じであると言われる。

首都クアラルンプール付近の商店や寺院では、太鼓腹でお金を持って笑っている像を目にした。ラフティングブッダと呼ばれるその像は、華人には弥勒として認識されている。また、インド人にはインドで北側を守る財の神、クベーラ (日本の毘沙門天) と同一視され、ヒンズー寺院にラフティングブッダが置かれることがある。元々はルーツが異なる神仏が、造形や性質の類似性から同一視されるのである。

さらにマラッカ州の郊外には、ヒンズー寺院と華人廟 (びょう) の合体した寺院 (チンディアン寺院) がある。ヒンズー様式と中国様式を兼ね備えた寺院には、南インドのマドゥライヴィーラン神とカルマーリアン

マン女神、それに華人の神、大伯公が祭られている。

マドゥライヴィーラン神に祈って病気が治癒した華人が祠 (ほこら) を建て、その後で他の 2 神も祭られるようになった。祭礼の際には、インド人も華人も神霊に憑依 (ひょうい) され、火渡りの儀礼に参加する。

華人の神々とヒンズー教の神々が 1 カ所ですべて祭られている寺院は、他にもペナン州やクアラルンプール周辺などにある。元々同じ地域に祭られていた神々は、それがヒンズー教であろうと道教であろうと、寺院を建設する際に合祀 (ごうし) されていた。祭っていた住民が移住しても、神の絵や像が残されていると、残った住民がそれを一緒に祭るのである。

日々礼拝儀礼を行う人や霊媒師は、ヒンズー教徒の場合もあれば華人の場合もある。また祭礼の際にヒンズー司祭や道士が儀礼をつかさどる。そのため祭り方や礼拝の仕方は、ヒンズー式であったり、中国式であったりする。そうした場所に集う人は、華人とインド人とでは礼拝の仕方は違うように見えるが、信仰は同じだという。

財、健康、力は、幸福な生活に欠かせないものであり、そうした願いを成就してくれる神々は、出身地がどこであろうと、ありがたい存在なのである。

ルーツは異なるが、さまざまな願いに応じてくれる多種多様な神々が、長い年月をかけて、移民の子孫の生活に溶け込んでいる。洗礼の儀式も入信の儀式も必要のない、ヒンズー教と華人宗教は、他宗教を取り込む寛容性を持っているのである。ヒンズー教や道教は、特定の民族に信仰されているため、民族宗教であるといわれる。だが、民族が移動し、定住するようになると、民族を超えて信仰されるようになる。

< 筆者紹介 >

慶應義塾大学大学院社会学研究科修了。専門は文化人類学。南インド・ケララ州で村落祭祀 (さいし) を研究した後、マレーシアのヒンズー文化に関心を持ち、現在マレーシアおよびシンガポールでヒンズー教と華人宗教を比較研究中。インド文化著書に、『南インドの芸能的儀礼をめぐる民族誌 生成する神話と儀礼』(明石書店 2018 年)、「開発に抗する寺院 マレーシアのヒンドゥー教をめぐる事例から」(『宗教と社会』25 巻、2019 年) などがある。